

【図1】第三次中長期計画のロジックモデル

10年後の社会目標（最終アウトカム）

多くの人が琵琶湖とともに生きることの価値を感じることができ、その幸せが将来にわたって継承されていく

中間的な目標  
（中間アウトカム）

誰もが日常の中で、湖との暮らしのより良いあり方を探求できる

さまざまな人びとが出会い、学びあい、多くの人と共有・実践する機会を持てる

湖と人間を考える人びとの活動が持続的に行える

博物館の事業は、複合的に関係し合っているために、複数の目標に関係してしまうが、中心的な役割で分けてみる

直接アウトカム

**事業目標 1**  
琵琶湖研究を中心とした湖と人間の研究が推進される

**事業目標 2**  
整った環境で保管されている湖と人間の資料・情報がどこからでも使える

**事業目標 3**  
利用者が実施者になった多様な交流事業と情報交換が行われる

**事業目標 4**  
湖と人間の最新情報が常に得られ現場への興味をもつ人々が増える

**事業目標 5**  
利用しやすい場所で人びとの活動が行いやすくなる

**事業目標 6**  
安心感がある場所で安定的に継続した活動ができる

【実施する事業】

- 【事業目標 1】琵琶湖の魅力を深く掘り下げ、世界に紹介
- 世界有数の古代湖としての琵琶湖の価値を高める研究計画の実施
- 研究成果を国内外に発信し、国内外の研究者が参加する研究を推進する
- 研究の質を高める研究環境の整備

- 【事業目標 2】資料を未来に遺し、どこからでも使えるように整備
- 標本・資料の管理体制の強化
- 標本・資料の整理の推進と公開によるデータベースの充実と利用促進
- ICT利用による博物館資料について画像を中心とした資料情報の公開

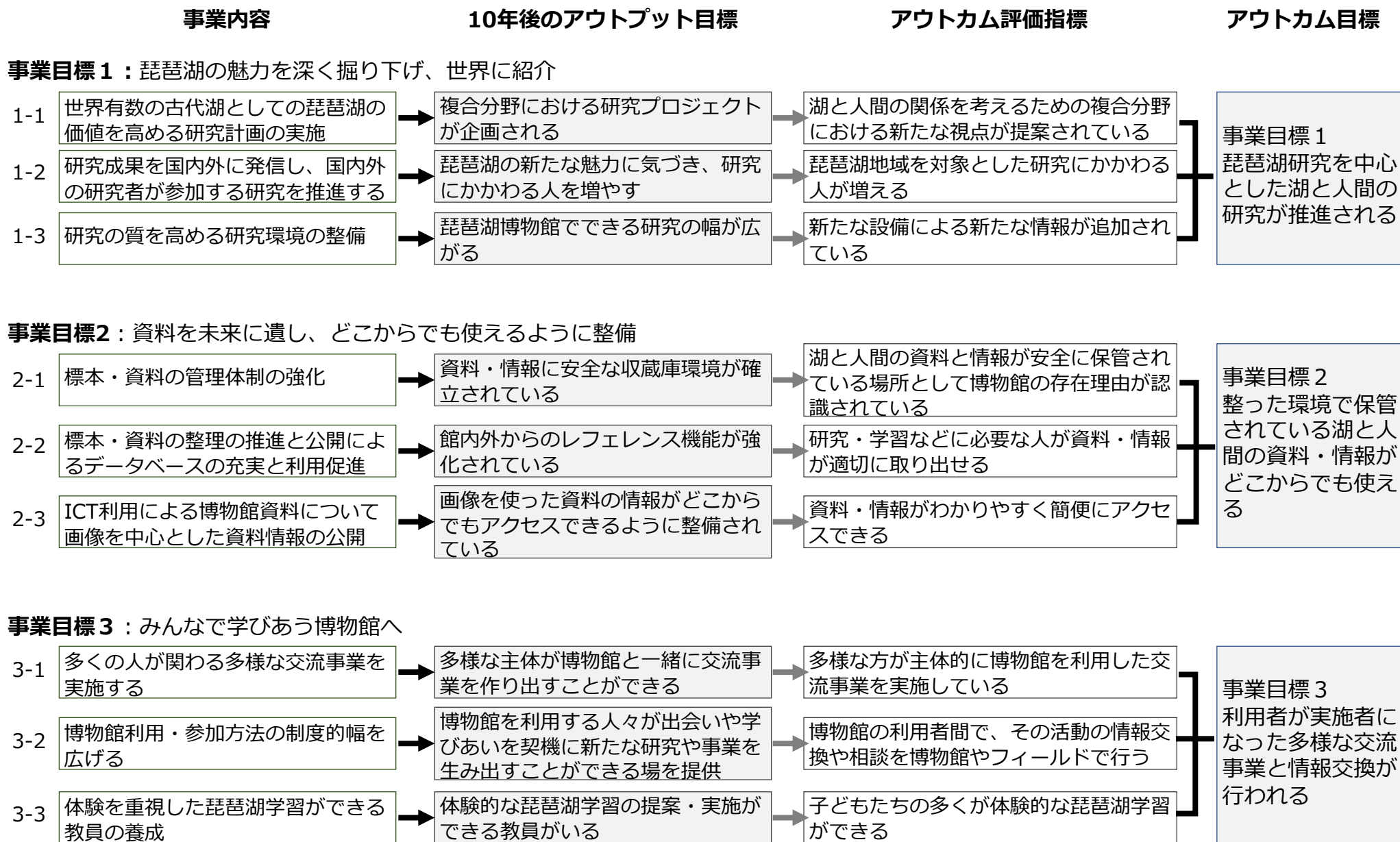
- 【事業目標 3】みんなで学びあう博物館へ
- 多くの人が関わる多様な交流事業を実施する
- 博物館利用・参加方法の制度的幅を広げる
- 体験を重視した琵琶湖学習ができる教員の養成

- 【事業目標 4】もっと使いやすい博物館へ
- 誰もが楽しみ学べる展示手法とガイド機能の強化
- 「観る」展示から「観る+使う」展示への成長
- 社会の変化や研究成果を反映させた展示の成長
- ICTを利用した琵琶湖の魅力とその入口としての博物館の紹介

- 【事業目標 5】より多くの人々が利用する博物館へ
- 双方向の広報や各種調査による評価方法の確立と事業への反映
- 来館しやすい環境の整備

- 【事業目標 6】博物館の活動を安定して継続する
- 老朽化した施設の改修と現状での施設に合わせた災害への備え
- 安定した活動基盤を確保する仕組みづくり

【図 2a】第三次中長期計画の事業目標 1～3 の重点事業と事業目標との関係



【図2b】第三次中長期計画の事業目標4～6の重点事業と事業目標との関係

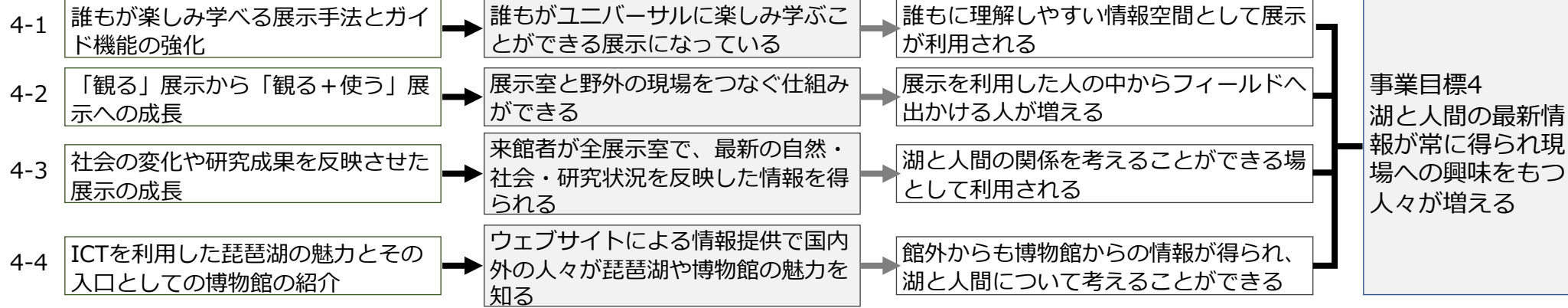
事業内容

10年後のアウトプット目標

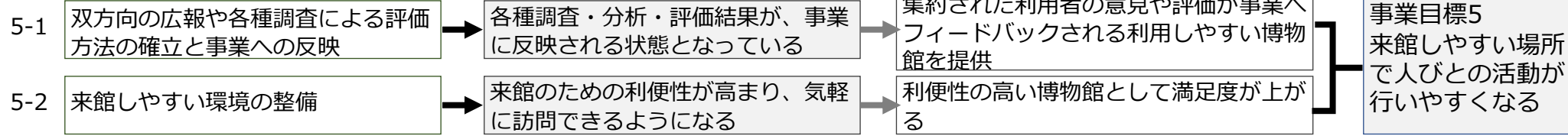
アウトカム評価指標

アウトカム目標

事業目標4：もっと使いやすい博物館へ



事業目標5：より多くの人が利用する博物館へ



事業目標6：博物館の活動を安定して継続する

